〔論　文〕

『ヘロディアス』のカルネ分析

Analyse des Carnets de *Hérodias*

大　橋　絵　理
Eri Ohashi

フローベールが『ヘロディアス』の執筆の意図を明確に示したのは、1876年8月17日のカロリーヌへの書簡の中であったが[1]、カルネ[2]を見るとこの作品の構想は『聖アントワーヌの誘惑』のカルネを書いている最中にすでに現われていたことがわかる[3]。『ヘロディアス』にかんするカルネは、おもに、カルネ16bis,カルネ16,カルネ０に含まれている。これらのなかで、カルネ０は『ヘロディアス』のためだけに書かれているが、カルネ16bis,カルネ16は、大部分が『聖アントワーヌの誘惑』についてであり、そのなかに、『ヘロディアス』のフォリオが散りばめられているのである。このように、『三つの物語』のほかの二つのコントに比較しても、多くの『ヘロディアス』にかんするフォリオがカルネのなかに残されていることがわかる[4]。つまり、それは、フローベールが草稿に取りかかる前に、すでに非常に時間をかけていたことを示唆するものであり、『ヘロディアス』がいかに作者の思考過程の中で練られた作品であったかを証明するものである。

正確な年代は明らかではないが、カルネ16bis は1870-71年および1876年に、カルネ16は1871-1872年および1876年に、カルネ０は1876年に制作されたと考えられている。だが、そのほかに1870-1879年におそらく記されたと思われるカルネ20[5]のなかに、唯一『ヘロディアス』のためではないかと考えられるフォリオが存在する。それは、$F^0 24 V^0$であり、1871-1873年かあるいは1876年に書かれたと推測されている。

Tristram. Land of Moab Murray?
Atlas 〈de〉 Mencke bible-atlas
〈Ruines〉 [Arak] Aarak el Emir, décrites dans le second voyage de Saulcy
Vog . Du temple
Luynes: grand ouvrage
Description des bains de Callirho près de Macherous =
Màkahous dans l'itinéraire de Fortia d'Urban.
Monnaies : Madden, History of Jewish coidge.
Géographie du Talmud : Derembourg.
Graëtz, Hist des Juifs. [571-572]

このようにカルネ20の$F^0 24 V^0$には、死海近辺の地理あるいは旅行についての本が記されており、他のカルネとは非常に異なっている。これは、作品の構想のために読むべき参考文献のリストだと思われる。年代的な点においては幾分の曖昧さが残っているにしても、この$F^0 24 V^0$が、

『ヘロディアス』のカルネのなかでも初期の段階に位置していることは否定できない。その中に、物語の舞台と設定される〈Macherous〉あるいは〈Mâkahous〉という地名が2度も見られることから、最も初期の段階で、フローベールが「マケルース」をコントの空間として設定していたことがうかがえる。このように、カルネは『ヘロディアス』の構想の原型であり、フローベールが何について興味があり調べる必要があったかを提示していると言っても過言ではない。以上のような書物をカルネ20でリストにあげたフローベールは、どのような過程をたどって『ヘロディアス』執筆へと至ったのだろうか。さらに、歴史的に重要な役割を果たしているヘロド、サロメ、エリヤでもあるヨカナンでもなく、なぜ、コントの題名が『ヘロディアス』でなくてはならなかったのかを、カルネをとおして詳細に検討していきたい。

1．カルネ 16bis

『三つの物語』、とくに『ヘロディアス』は『聖アントワーヌの誘惑』の創作と微妙に結びついている。カルネ16bis[6]の1 V^0には「ギュスターヴ・フローベール。1868年7月18日 […] 1876年7月6日」[607] というように名前と日付けが記されている。つまり最初の日付けはフローベールが『聖アントワーヌの誘惑』のためにこのカルネ16bis を制作したこと、さらに次の日付けは明らかに 8年の中断の後『ヘロディアス』執筆に際してノートを付け加えたことを示していると考えられる[7]。

カルネ16bis は、カルネ16やカルネ0に較べて、おそらく早い時期に書かれたと推測されているが、そのなかにメモされているのは、おもに3人の人物である。1871あるいは1872年頃、つまり『聖アントワーヌの誘惑』のためのカルネと同時期に、フローベールの興味を引いた人物が、ヴィテリウス、その息子アウルス、ジャン・バティスト＝ヨカナンであったことは、『ヘロディアス』の起源を知るうえで注目に値するであろう。

16bis の F^0 3で、「ヴィテリウスは、もっとやせている。大きな目、まっすぐな鼻、ナポレオンの顎、重ねられた(3列になった)小さな縦ロール、2列目と3列目のあいだに王冠をつけている」[608]と書かれている。また、彼の尊大な様子は、『ヘロディアス』のなかでも、「彼は、通訳の腕によりかかり、鳥毛と鏡に飾られた大きな朱塗りの駕篭を従え、トーガの下には、元老の赤の飾り帯をつけ、執政官の長靴を履き、身は警士達に囲まれていた」[8]と描写されている。彼は自分の足で歩きもせず、他の人間によりかかり、まるで、トーガが彼の身体であるかのようである。彼はカルネに描かれているその「ナポレオンのような」皇帝然とした容貌と、最終稿での元老の帯や執政官の長靴、そして彼を囲んでいる警士たちによって、まさにローマの権力と化しており、絶対の支配力を持つ存在としてとらえられていることがわかる。

次に、16bis の $F^0 5 V^0$でフローベールはラテン語で16にもわたる馬の名前を明記している。そして、さらに $F^0 6$では「馬は頭の上の耳の間に、まっすぐ立った高い羽飾りをつけていた。それらはまるで木のように立っており、風でかしいだ。胸には（真珠の？）飾りをつけている」[610]と記している。その馬が身につけている装飾は、『ヘロディアス』にでてくる隠された百頭の馬の美しさとどこか似通っている。「いずれもたてがみを青く染めて、ひずめを刺子の袋につつみ、耳のあいだに垂れかかった毛が、額の上にふさふさとして、鬘のようである」[9]。これらの馬達はたんなる労働のための動物ではなく、生きている財産として貴重なものであり、その華やかな馬の所有は権力の象徴でもあるのだ。以上のようにフローベールはカルネ16bis

の $F^0$3でヴィテリウスの描写を行なったのち $F^0$5V^0で馬の名前を羅列し[10]、さらに $F^0$6V^0で馬の特徴を詳しく述べている。カルネのなかのこの順番は、『ヘロディアス』の展開と全く同じである。ヴィテリウスはヘロドに城の地下室を見せるように要求し、武器の穴蔵を見つけ、次に隠してあった百頭ほどの馬を見つける。それに続き、地下に閉じこめられていたヨカナンを発見するというように、ヴィテリウスの存在は劇的な効果を物語の中であげているのである。ヴィテリウスのヘロドの城への到着は、確実にヘロドとヘロディアスの運命が転落していく契機となったのであり、地下の馬は明らかにヨカナンの出現の前兆ともいうべき存在なのだ。このようにカルネ16bis のなかで最初に現われたヴィテリウスは、ヘロドが隠蔽したがっていること、無意識的に否認しようとしていることをすべて暴き、白日のもとにさらすという最も重要な役割を果たしていると言える。

一方、$F^0$22では、「ヴィテリウス、皇帝〈若い〉。大きな鼻、肥満している、肉のつきすぎた頬、埋まった目。父親はシリアの総督、冷酷無慈悲な容貌、がっしりとした顎、まっすぐな額、、前に突き出た鼻、長い首」[638] と書かれている。ここで、問題となっているのはヴィテリウスの息子、アウルスであり、彼の肥満した鈍重な姿は、父親の冷酷な鋭い容貌と対称的である。息子は、カルネに書かれたのとほぼ同様の姿で『ヘロディアス』に登場している。彼は、マケルースの城にヴィテリウスに少し遅れて到着する。「8人の男にかつがれてきた駕篭が止まった。太鼓腹に、にきび顔の、どの指にも真珠の指輪をはめた一人の公子が歩み出た」[11]。しかし、彼は父親とともに城や地下の探索へは出かけない。彼が、幾度となく物語に現われるのは第3章のヘロドの誕生日の饗宴の場面である。一見、『ヘロディアス』のなかで、アウルスはほとんど何の役割も果たしていないように見える。だが、注意深く饗宴の場面を読み進めていくと彼の姿はいたる所に登場するのである。

『ヘロディアス』の饗宴の空間は、各地から運んできた様々な食材と雑多な民族の集合の場であり、世界の縮図とも考えられる。それらの民族を統合しようとする知的な支配意識がヴィテリウスに、その対極に位置する食欲や性欲という人間の本能的欲望がアウルスに象徴されていると考えられる。アウルスは権力闘争や財宝にはほとんど興味を示さない。かれが固執するのはひたすら食物だけである。

> アウルスが、額に汗を流し、青い顔をして、拳を腹におしあてたまま、寝椅子の縁に伏しかかっている。[…] アウルスは胃の腑のものを吐き出すと見るや、またも食いたがった。「おい何なりと持ってまいれ、大理石の屑、ナクソスの雲母、海の水、なんでも食うぞ！一風呂浴びるといたすかな」。[12]

アウルスの食欲はとどまるところをしらない。それはたんに食物へと向かうだけではない。彼は、大理石という鉱物や、海の水、いわば世界を自分の身体のなかに貪欲に飲み込んでしまおうとしているのである。さらに、「一風呂浴び」ようという言葉は、彼自身が食物となり、蒸気のなかで茹であげられるイメージを想起させる。彼は、物を食べて自己に取り込むだけでなく、自らの肉体を食物と同化させたいという欲望を持っていると言える。彼は本能自体と化し、精神性は完全に欠如し、彼自身が肉の固まりになるのだ[13]。

しかしながら、唯一死んだヨカナンの首と語り合っているように見えたのが、アウルスなのである。『ヘロディアス』のなかでは、ヨカナンは、人間とは隔たった肉体を持たない異形の者のように描かれており、彼の存在感は、ただ滔々と語り諭す、言葉によってのみ強調される。

また、彼の首が切られる場面も、マナエイの言葉を通じて間接的に語られるだけで、その表現も幻覚と混じりあい現実感は希薄である。そして、切られた彼の首にも血のあとはほとんど見られない。「血ははやくもかたまって、髭の間に飛び散っている」[14]というように、首がはねられても間もないというのに、ヨカナンが直前まで生きていたことを示す表現は何ひとつ見当らない。最終稿のなかでは、ヨカナンから人間を暗示するものは、生死にかかわらず消滅している。それでは、なぜ、『ヘロディアス』の最終場面において、肉の化身のようなアウルスと精神性の象徴であるヨカナンの首が、唐突とも思える奇妙な同調を示すのだろうか。

カルネ16bis の $F^0 24V^0$, $F^0 24$, $F^0 23V^0$, $F^0 23$にはジャン・バティストにかんするメモが書き残されている。$F^0 24$、$F^0 23V^0$は聖人伝についてであるが、とくに $F^0 24V^0$、$F^0 23$では、ジャン・バティストの名が記されている。$F^0 24V^0$には、「ジャン・バティスト＝ホ［オ］〈ア〉ナ、血は偉大な悲惨が起こるまで止まらなかった。ユダヤ人によって保管されていた白いチュニックそしてそれは再び出血した」[636]とある。ここでは、バティストの肉体の描写はないが、「血」という言葉が繰り返し使用されることによって、我々は彼の生身の身体、エリヤというよりも彼の人間としての存在を感じることができる。さらに、カルネ16bis の $F^0 19V^0$には「聖ジェロームによると、ヘロディアスは針の先で彼の舌を突き刺 した。アントワーヌの妻がキケロにしたように」[640]とメモされている[15]。ここでも、バティストが受けた肉体への拷問は具体的な形となってあらわれ、彼の苦痛は想像しやすく身近なものになっている。カルネでは、「血」や「舌」という身体の部分を表す言葉が強調され、彼も血を限りなく流す者として、あくまでも、肉体を有した聖人という立場にあるのである。

このように『ヘロディアス』の最終的な描写の奇妙なヨカナンとアウルスの共感は、必然的なものであり、フローベールによって意図されていたことが明白となる。カルネを見ると、アウルスは肉によって、ヨカナンは血によって象徴されており、彼らは合致して考えられることによって、はじめて人間の特徴を形成するに至るのだ。なによりも、カルネ16bis で記されている名は、おもに、ヴィテリウスとアウルスとジャン・バティストである。彼ら３人は、共通点は皆無のように見えるが、実際は、おのおのの特徴により、作用しあい分かちがたく結びついている。ヴィテリウスは地上の権力として、アウルスはその肉体により地上の欲望として、そしてジャン・バティストはそのあふれでる聖なる血によって、人間でありながらも精神の至高性を表明する者として相互的に関係を築きあげ世界全体を表現しているのである。結局、カルネ16bis を 読み解くことによって、『ヘロディアス』のなかの世界は、これら３者の隣接する特異性によって形成されていることがわかる。彼らは、『ヘロディアス』の物語的時間においては未来に属する要素となっており、一方、ヘロド、ヘロディアス、サロメは過去に属していきつつある要素となっている。つまり、ヴィテリウス、アウルス、ヨカナンは、差異によってお互いを際立たせながらも共通の可能性を持った連続体となり、物語時間を越えた未来の世界を暗示しているのである。

2．カルネ16

カルネ16[16]はおおよそ1871年から1876年まで、つまり『聖アントワーヌの誘惑』、『三つの物語』、『ブヴァールとペキュシェ』のカルネを含んでいる。そのなかで『ヘロディアス』に関係があるのは13のフォリオのみである。カルネ16bis の『ヘロディアス』にかんするノートはお

もに登場人物についてであったが、カルネ16には、マケルースへの道筋、ヘロドの時代の宗教、習慣等が書かれている。カルネ16の $F^0 38V^0$ は、ほかのフォリオに先行していると考えられ、それがマケルースへ到達するための道の記述であることは興味深い。「マケロンへ行くため、赤い砂岩の〈坂の〉岩。古代の道〈の残り〉」[671]。だが、マケルースへ到るまでに古代の道が残っていることや、赤い砂岩の傾斜があるという描写は最終稿のなかでは見当らない。この $F^0 38V^0$ が、執筆直前に書かれた他の『ヘロディアス』のフォリオに先立って、『純な心』のフォリオの前に見つかったことは、フローベールの創作にあたっての意識を知るうえで重要である。つまり、$F^0 38V^0$ の道程は、彼が『ヘロディアス』の物語世界へ入って行こうとする道程でもあったと言える。そしてまた、この事実は、フローベールが思考の内部で辿った道が、同様にマケルースの城へと入っていったヴィテリウスやアウルスやヨカナンの道と一致することを示している。「マケロンへ行くため」という表現からもわかるように、「古代の道」は、物語の外部から内部へ移行していくために、必ず経なくてはいけない過程なのだ。$F^0 38V^0$ は、あらゆる外部の者たちが辿った通過点という意味で、カルネ16bis のフォリオと連続しているとも考えられるのである。

その後に続く $F^0 45$ から $F^0 50V^0$ は草稿に取りかかる直前までの1876年の８月20日から10月20日までに書かれたと推定される。とくに、$F^0 45$ や $F^0 45V^0$ には、アラビアでのデュザレスの礼拝の習慣や、ローマの軍隊、ローマの兵士たちの名前などがメモされている。ローマ帝国こそが、ヘロドの属している国なのであり、ローマという背後の強大な力を抜きに、『ヘロディアス』は存在しないと言ってもよい。また、$F^0 46$ では、「ヘロドは3000人のイズメ人をトラコニットのはずれに配置した」[676] と書かれている。イズメ人はヘロドの家系につながる者たちであり、トラコニットはヘロドの領地である。彼は、危うく思える自分の支配を堅固にするために、トラコニットの辺境にイズメ人を配置しているのである。以上のフォリオは、ヘロドの政治的状況、彼の権力とその危うさを歴史的、家系的に示していると言える[18]。

さらに、このような複雑な歴史的事情を抱え込んでいるヘロドの統治している国の緊張感を高めているのは、ヴィテリウスが総督をしているシリアであった。そのシリアの町のエメーズが、特殊な宗教の中心地であったことも、カルネに記されている。$F^0 47$ では、キリスト教の始まる前後２～３世紀に渡るエメーズを統治していた王朝の王子の名や、「フォムズで、太陽の礼拝。エラガバル、その偉大な司祭」[pp.678-679] というように太陽信仰について書かれている。また、$F^0 47V^0$ の「シュメッシュは太陽神である」[680] と一文からも、カルネの段階でフローベールが異教の太陽信仰に深く興味を抱いていたことがわかる。エメーズに太陽信仰の有名な寺院があったという事実からしても、太陽信仰はヴィテリウスの権力と結びつき、ヘロドに対してだけでなく、キリスト教的世界にも激しく対立していたのである。だがそれにとどまらず、$F^0 48V^0$ には「アグリバル：月の神」[680] というように、太陽神と反する月の神の名も見られる。また、$F^0 48$ のなかでは、「アトシュ、アラビア人に崇拝された女性の神」[680] も出現する。ジャン・バティストというキリスト教の象徴が、物語の中心になることが決定されていながらも、なお異教である太陽神や月の神について、またキリストとは対照的な女性の神についてメモが取られていたということは、『ヘロディアス』が潜在的に多層的な視野のもとで描かれたことを示している。信仰の多様性は、そのまま民族の、ひいては個人の多様性にも連結していく。$F^0 48$ と $F^0 48V^0$ には、神についてのメモのすぐ下に、様々な男性、女性の名が連ねられている[19]。$F^0 48$ では、「男性固有名：マナイ、ワバラトュ、エラベル、ベラカブ。女

性：セゴル、ベルティバン、アマタ、バトュセイベイダ」[680]という名が見られる[20]。このような、人間を超越する存在である神の名と神の下位に属している一介の個人の名の並列は、ある種の混沌を重視している結果であると考えられる。そして、この混沌こそが『ヘロディアス』の本質なのである。

しかし、カルネ16の記述は、最終的に以上のようなヘロドやヘロディアスの世界を終わらせる２人の有名な権力者の名があげられて終わっている。次に見られる$F^0 49V^0$はアラビヤの王、アレタスについてのメモである。

> ナバテェアンの君主［…］＝アレタス　アエネアス（紀元前７年－紀元後40年）、オボダスの息子、二人の妻を持っていた：ユドラとセケラト。ヘロド・アンティパスの義父は、ガリレヤの分国主である彼（ヘロド・アンティパス）にヘロディアスと彼の結婚を理由として宣戦布告をし、彼を打ち負かした。ティベリウスはヴィテリウスを救援に送った。[681]

アレタスの名は直接最終稿のなかに見られないが、次のように彼の存在が示されている。「その南端、イエメンの方向にあたって、アンティパスは眼にするのを恐れていたものを見た。いくつとなく褐色の天幕があちこちと張られて、槍を手にした人の影が軍馬のあいだを行き交いつつ、消えかかった焚火が地面の上に花火のようにきらめいている。アラビヤ王の軍勢である。アンティパスはこの王の娘を離別して、政権の望みを断ってイタリアに住む兄の妻なるヘロディアスを娶ったのである。アンティパスはローマの救援を待っているが、シリヤの総督ヴィテリウスの来着が遅いので不安の念に悩まされている」[21]。

ここで、アレタスという固有名が出されていないのは、匿名ゆえの恐怖感という効果を生み出すためである。直ちに攻めてくる行為に及ぶわけではないにもかかわらず、彼の軍勢は遠くに待機している。人も馬も影のようであり、焚火さえも花火のようで、その光景は幻想的とも言える。だが、そのような現実感の欠如が圧迫感を増大させ、アレタスの存在を堅固なものにしているのである。実際、アレタスこそが、$F^0 49V^0$にメモされているように、ヘロドのもとにヴィテリウスが送られた原因となっているのであり、ついにはヘロドの国を破滅させることになるのだ。

また、$F^0 50$には、カリギュラの名も見られる。彼の名もまた、最終稿には現われないが、「甥のアグリッパが、あるいは、わが事を皇帝の前に讒訴したのではなかろうか」[22]というヘロドの不安のなかに暗示されている。なぜなら、結局、史実としてヘロドはアグリッパのカリギュラへの申し立てにより、大守の座を追われて、流浪せざるをえなくなるからである。アレタスとカリギュラという二人の人物は、ヘロドの追放の首謀者なのだ。カルネに見られるこれらの固有名は、確実にヘロドの築きあげた世界を崩壊へと導く決定的要素として最終稿の背後に潜んでいたのである。

以上のように、カルネ16により明確になったことは、ヘロド、ヘロディアス、サロメ、ヨカナンの物語という幾度となく過去の作家たちに取り上げられた題材を、再び新たな技法を駆使して描きだすのがフローベールの目的ではなかったということである。彼が、周知であるはずの歴史的時間に逆らって、あえてヴィテリウスの到着の日とヨカナンの処刑の日を一致させ、物語的時間を創りあげたのは、混沌とした世界の避けがたい崩壊への一定の方向性を示唆したいという意図によると言えるであろう。

3．カルネ0

『ヘロディアス』のためにのみ書かれたと考えられるカルネ0[23]は、いつ書かれたかというはっきりとした日付は確認できない。カルネ0は *Carnet be voyage n° 6* という1850年にフローベールがエルサレムからダマスカスを通って死海近辺に旅行した時に記されたカルネに続いて発見された。日付不在からカルネ0がカルネ6の直後に書かれたものか、ヘロディアス執筆の際に書かれたものか明確にはできないが、フローベールが『ヘロディアス』を書くにあたって、このカルネ0を参照にしたことは内容的に見て明らかである。おそらく、カルネ0は1876年の9月から10月にかけて草稿執筆の直前、資料を探していた時か、あるいは『ヘロディアス』の計画のために『純な心』を中断していた1876年の4月の終わりに再編されたと考えられている[24]。

フローベールは、このカルネでは、他のカルネよりさらに詳細な、あるいはそれらをもっと発展させたメモを取っている[25]。カルネ0の$F^0$3、$F^0$3V^0、$F^0$4、$F^0$4V^0、$F^0$5、$F^0$6はすべて死海近郊、モアブ山岳地など、舞台となっているマケルースの城の場所に関係のある土地の描写である。これらを見ると、まずフローベールの興味を引いたのは、個別化された世界であったことがわかる。たとえば、$F^0$3V^0には、「動物、果実、葉」[748]とメモされている。まさに、彼は総合的というより近視眼的な見方をしており、その特質はメモが進むにしたがってさらに細分化される。実際次に記されているのは「ライオン、ガゼル、人間」[748]となっており、メモは「動物」という種に限定されていっている。$F^0$3V^0の後半には、「野性の驢馬、雌小羊、アマツバメ、野性のチューリップ ― カリロエの川はオリーヴの木の間を流れている。野性のイノシシ。― そこで人々はカジカに似た種類の魚を釣る」[748]と書かれている。ここに現われる動植物はパレスティナ近辺に生息するもので、カリロエはマケルースの近くの温泉の町である。このように、コントに直接関係がなくても、町の名から動植物の名まで、各部分が次第に具体性を帯びて連続し結合することによって、初めてコントの地理的全体性が姿をあらわすことになるのである。

その個別的過程を経て初めて、$F^0$4になってから全景のメモが取られている。この$F^0$4は、ヘンリー・ベーカー＝リストラムの『モアブのキリスト、死海の東海岸とヨルダン川紀行と発見』[26]からの抜粋である。

> 三時間後、我々は玄武岩の巨大な急流に到着した。渓谷は、最初閉ざされた雰囲気を持っていたが、実際は狭い裂目のようになっており、急速に深くなり、山の高さのほとんど半分から、両側に落ちていた。
> […] 渓谷の数々の先端では、水は太陽によって乾かされ消えているか、あるいは石の川床のなかに沈み込んでいる。キョウチクトウと水は常にともにあり、そしてお互いを守っている。
> …
> すべての玄武岩が南に見える一方、すべての泉は北で湧いており、そしてちょうど赤砂岩と石灰岩の接点のところに現われてくるのである。[749]

ここでは、動物や植物については、ほとんど触れられていない。そこにあるのは、玄武岩と急な流れでできた厳しい自然の渓谷である。自由に流れを変え、姿を変える変自在の水の柔軟さと、人を寄せつけない雰囲気を持った黒い玄武岩の堅固さの対比がとくにフローベールの注意を引いたように思われる。動物や植物の存在は排除され、前固体的・非人称的な原風景が支配

していくのである。最終的にこの原風景が『ヘロディアス』の冒頭へと連鎖していくことになる。「マケルースの城は、死海の東、円錐状をなす玄武岩の峰の上にそびえていた。四つの深い渓谷が、２つは側面、一つは正面、一つは背後に城を巡っている」[27]。玄武岩と死海と渓谷という生物の存在を想起させない世界は、世界の起源 という意味において、まさにコントの始まりにふさわしいと言える。また、「円錐形」、「側面」、「正面」、「背後」という図形的な単語の使用の仕方から、コントの舞台のイメージをあえて空間的、立体的にしようという作者の意図が読み取れる。

それは次の $F^0$5のフローベールが描いた簡単なキリストの時代のパレスティナの地図からもうかがえる[28]。

ダマスカス

ゲネザレス湖のクロッキー

ガリエ　　バタネ

地中海の海岸の　　ティベリアッド

クロッキー　　トラコリット

サマリア　　ペレ

死海

ジュデ

イズメ　　死海のクロッキー　　[750]

このような地図をフローベールが描くことはきわめて珍しく、『三つの物語』のなかでも他では見られない。ここで、問題になっているのは、$F^0$4でのような描写ではない。$F^0$4が、舞台となるマケルースの城を知るための読者の視点だとすると、$F^0$5の数々の町の名や湖あるいは海の名はヘロドの視点と一致するのだ。つまり、カルネは読者がコントの物語的世界へと入っていけるような外観からの視点を経たあと、自然に城のバルコニーから下界を見下ろすヘロドの視点、換言すればコントの内部の視点へと移行していく過程を示している。

そして、次の $F^0$6は、$F^0$4の死海近辺の情景描写の翻訳と $F^0$5の固有名詞を結び合わせ、フローベールが自分の言葉で綴ったものに取って変わっている。

マケルース

建物の残骸が２つの丘を覆っている。アクロポリスの頂上から死海がとてもよく見える。近郊には、エンガデ、エルサレム、ヘブロン、エリコ、ナプルズ。[751]

この風景こそまさにコントの空間の凝縮である。$F^0$6メモが決定的にヘロドが見下ろす場所の描写に影響を与えたことは確実である。それまでカルネにでてきた町の名の集合に較べて、$F^0$6の町の名はナプルズを除いてすべて、次のように最終稿のなかに見いだせるのである。「眼下の山々は、[…] もう頂を現しはじめていた。漂っていた朝靄が破れて、死海の輪郭が現われた。[…] エンゲデの町が、そのなかほどに、黒く一線を横たえている。ヘブロンの町は、その奥に丸屋根のようにうずくまっている。[…]エルサレムの都を見下ろしている。太守は[…]エリコの町の棕櫚林を眺め、他の町々にも思いを馳せた」[29]。

さらに、$F^0$6は冒頭の城を取り巻く外部空間と関連しているだけではなく、城の内部空間にも言及している。「ル　メンジル＝降りていく場所。2段階：底には人間のためのがひとつ、馬のためのがもうひとつ。ギリシャのカーンと呼ばれる」[751]。このメモは明白に、ヴィテリウスがマケルースの城で見つけた洞窟の起源となったものである。馬が隠され、ヨカナンも幽閉されていた2つの洞窟がすでに、草稿にとりかかる以前、カルネの段階であらわれたという事実の重要性は無視できない。しかも、それはマケルースの城の位置というコントの舞台となる空間のすぐあとに書かれているのである。以上のことから、これら2つの洞窟は表層的には高みに位置しているマケルースが、ヘロドの権力の象徴でもある地下、つまり深層から崩壊していく様を暗示していると考えられる。

さて、$F^0$7から、カルネには、もはや地理的な要素は見られず、内面的な部分にかんする文章が多く見られる。

> ヒルカンとアリストビュルは彼らの神の偉大な司祭の高位について争った。― その神がどのようなものかは、わからない。― そしてこの高位は、彼らの国で最高の権力を与えるのである。[754]

ユダヤ人であるヒルカンは、兄弟のアリストビュルと戦い、いったんは破れアレタス王のもとに身をよせていたが、その後アルストビュルをエルサレムの神殿で包囲し殺害したのである。この出来事は、ヘロドの臣下マナエイと深い関係を持っている。

> ヨカナンはユダヤの民である。マナエイはすべてのサマリア人のようにユダヤの民を嫌うからである。
> モーゼによってイスラエルの中心たるべしと定められたサマリア人のゲリジム山の神殿は、ヒルカン王以来跡かたもない。それゆえに、エルサレムの神殿こそ、侮辱のごとくまた絶え間ない不法のごとく、サマリヤの民の激憤をかっていた。[30)]

マナエイはヒルカン王の民族であるユダヤ人にたいして怨恨を抱いており、それこそがヨカナンにたいする憎しみになっているのである。一見無関係で、派生にしかすぎないカルネのこのエピソードは、実はヨカナンの処刑という、コントの最も劇的なエピソードの換喩的役割を果たしている。また、同じ$F^0$7の「シモンは彼はサマリア人のなかの大天使だと言った」[754]という文章も同様である。ここで言うシモンとは、ジトイのシモンのことであり、彼はサマリアで偉大な魔術師として名を広めていたのであるが、キリストの奇跡に接し、最後はキリスト教へと改心した。最終稿でも、饗宴の広間で彼の噂がなされる。「ヨカナンやそれに類する者の話が出ていた。ジトイのシモンは人の罪を火で清めると言う。イエズスとやらいう男は…」[31)]。そして、この饗宴の始まりで語られた話は、饗宴の最後でヨカナンを処刑しようとしたマナエイへ、またも連結していく。彼は、太守の命令にもとづく死刑執行人である。さらに、彼はサマリア人という設定になっており、すべてのサマリア人にとって憎悪の対象であるユダヤ人のヨカナンを殺害しようとしたにもかかわらず、同族のサマリヤの大天使から威嚇されるのだ[32)]。マナエイはヨカナンの処刑のためにフローベールによって純粋に創作された架空の人物である。マナエイの名および存在は一度も$F^0$7には見いだせないが、このような空白こそが、マナエイの存在意義を示していると言える。つまり、彼は歴史的人物ではなく、ヘロドの時代の匿名の人物である。$F^0$7にあるようなヒルカンとアリストビュルに象徴される権力者の対立のメ

モは、彼らの不当な物質的および精神的破壊行為の犠牲となったこの時代のすべての無名の者達の象徴であるマナエイを創造するために利用されたと言える。最後に、$F^0$7は「ユダヤ人はローマで、ヘロド大王のために饗宴を開いた。饗宴では、彼らは窓に明かりを灯し、浴びるほど飲んだ」[754]という文章で終わっている。もちろん、この饗宴は『ヘロディアス』の饗宴とは異なるが、しかし、あらゆる$F^0$7のエピソードを内包しているともいえる「饗宴」という言葉が、最終的にメモされたということは偶然とは考えられない[33]。

さて、$F^0$7が潜在的にマナエイと結びついているとすれば、$F^0$9は間接的にアンティパスの本質と関係がある。$F^0$9のメモのエピソードは、直接最終稿に使われてはいない。しかし、そこには非常に興味深い単語がいくつも散りばめられている。例えば、「悪魔主義は、ユダヤの唯一神信仰と異教徒たちが一致する中立的な場にある」[758]と述べられているが、これは最終稿の饗宴の場面で、様々な宗派の者たちがキリストについて語り合った言葉に一致する。「しかし、見もせずさわりもせず人の病を癒すとは、イエズスが悪魔でも使わぬ限りは、不可能なことではないだろうか。聞いていたアンティパスの友たちも、ガレリヤの長老たちも、首をふりふり相づちをうった。「まさに、悪魔じゃ」」[34]。悪魔主義の一文は、民族、宗教的にカオス的な場、つまり多様であるがゆえに絶対性が欠けている中立の場、饗宴の広間の対話を決定づける一因であると考えられないだろうか。

また、次に「カモスはモアブ人の神」[758]という文章が$F^0$9に見られる。このモアブについては同じ$F^0$9でもう一度触れられている。「モアブ人の王はユファラトの向こうに、呪術師バラームを探しにやった」[758]。この「モアブ人」という単語は、ヨカナンが地下牢から叫ぶ言葉のなかに含まれている。「モアブよ、汝は雀のように糸杉のなかに、飛び鼠のように穴のなかに身を隠さざるをえない。堅固なる城の門も胡桃の殻よりすみやかにうち壊れ、石垣崩れ落ちて、すべての町々は火に焼かれるだろう」[35]。彼はモアブ人が経験するであろう悲惨さを語るが、モアブという民族は実はマケルースという地と関わりを持っている。マケルースはモアブ人の古代の領地に位置しているのである。

さらに、$F^0$9の「オルタル（エルの光と火）エドム人とイスマエル人のそれ（神）」[758]というメモの「エドム人」という民族も最終稿に見られる。「「マカベ家の初代の王はあなたの一族をヘブロンの町から追い放ち、ヒルカン王はあなたの一族に割礼を強いたのです！」こう言いながら、ヘロディアスは、平民にたいする貴族の蔑み、エドムに対するヤコブの憎しみを吐きつけるように」[36]ヘロドを罵しり叫ぶのである。マカベ家というのはヘロディアスの祖先であり、それはエドム人と同義語である。

このように見ると、「悪魔主義」はキリスト、「モアブ人」は過去のマケルースの地の所有者、最後に「エドム人」はヘロディアスの家系に対応している。しかも、「モアブ人」は自らの地を奪われた民族として、マケルースの城に君臨するヘロドに漠然と敵意を抱き、エドム人はヘロド家との争いに破れ権力を剝奪されたという深い怨恨を持ち、悪魔とののしられたキリストは十字架にかかる時、ヘロドから嘲弄される。この三つの言葉は、いずれもヘロドと深層的に敵対するものの隠喩あると言える。さらに、モアブ人は過去において、エドム人はヘロディアスの民族でもあることから現在において、キリストは結局はユダヤ人をエルサレムから追放するという点で未来において、ヘロドを拒絶しているのである。結局、これらは過去、現在、未来の混在から、むしろ非時間性を示し、ヘロドの存在を絶対的に否認しているのである。そして、このような絶対の否定こそが、ヘロドが無意識下において絶え間なく感じている不安、恐

怖を形成しているのである。それは同時にヘロドという人物の本質であり、ひいては『ヘロディアス』というコントの根底に流れる虚無感であるとも言える。

最後に、カルネ０は最後は異神教のメモで終わっている。これらのメモは、カルネの終焉を告げると同時に、草稿の執筆を決意させるものとして、きわめて重要であると考えられる。さて、$F^0 9V^0$にはおもに、多様な神々の名が並べられている。このフォリオで特徴的なのはカルネ16とは異なり、性的な神が多く記されているところである。「バール・ペオールは猛々しい欲望の神であり、処女の胸を引き裂く制御できない愛の神である」[759]。バール・ペオールは、男性神であり、この神のもとで売春するために、モアブの女性たちは神殿に来ていたのであった。この神殿での売春はとくにフローベールの興味を引いたと考えられる。同じ$F^0 9V^0$に「聖なる売春は神殿で行なわれる。[…] ジョジアスはいくつもの小部屋を打ち壊した」[759]とも書かれている。ここでいう小部屋とは神のために天幕を織る売春婦たちが住む小さな家々のことであった。ほかにも「エルサレムの女性たちは、金と銀のアズシュラのシンボルを身につけていた」[759]という事実も記されている。アズシュラは快楽の女神であり、バールと対称的な存在で細長い三日月の形で象徴される。月にたいする信仰についても、「新月を見ながらのユダヤの祈り＜まだ今日でも＞：敵に恐怖と不安が襲うように、彼らが石のように不動になるように」[759]というメモも残している。売春婦をあやつる猛々しい男の神、あるいは月に象徴される快楽の女神の存在は、ヘロディアスを想起させる。彼女はまさに男性的、女性的な二面性を持っている。ヘロディアスは、叔父であるヘロド・フィリップと結婚したが、フィリップの失脚によって大帝国への夢を断たれたと知るや、もう一人の伯父ヘロド・アンティパスに美貌と嬌態で取り入ったのである。それは、アンティパスにとっては、異父母の妻を掠奪するという神の掟に背くものであった。彼女こそ、自らの権力の熱望により、人を裏切り、性的魅力によって男を惑わし、神の掟を破っても全く意に介さない超越性を抱いている存在なのである。彼女は、明白にアンティパスよりも猛々しく、彼の気の弱さをののしり、ヨカナンも恐れはしない。彼女は、彼女自身において絶対なのであり、バールやアズシュラなどの異教徒の神々と共通点があると言える。

実際、彼女は神のように、自分の巫女も持っている。それが、サロメである。サロメはアンティパスを惑わすために、密かに連れてこられ、饗宴の場であらゆる男を魅了するエロティックな踊りを踊らされる。最終稿でサロメは「インドの巫女のごとく、滝にうたれるヌビヤの神楽乙女のごとく、バッカスを祭るリジヤの女のごとく踊った」[37]と描かれており、売春を持って神につかえる巫女的存在であることは明らかである。彼女の神は母親、ヘロディアスなのだ。彼女は、ヘロディアスのあらゆる命令に従い、ヨカナンの首をも要求する。このように、$F^0 9V^0$は、ヘロディアスとサロメの人物形成に影響を与えたと考えられる。

$F^0 10$にもやはり悪女の挿話が書きとめられている。「リリトは、太陽神、アッシリアのサマスの妻の一人であり、若い妻の姿であらわれ、男たちを殺す忌まわしい女吸血鬼である」[760]。リリトはアダムのもう一人の妻であり、エヴァが神に認められた妻であるのに反して、神を拒絶した悪魔的妻である。彼女は、アダムのもとにとどまるようにという神の忠告を無視し、反対にアダムとの間にできた彼女の子供である小悪魔を天使たちが消したら、ほかの子供達を未来にわたって殺すと脅すのである。このような、絶対的な神を恐れるどころか、神の掟をヘロドを誘惑して破らせるという行為におよぶヘロディアスは、リリトと明白に同種の存在である。リリトについては様々な説が議論されているが、そのなかの一つでは、リリトはアダムのあと、

異教の悪魔神サマスと結婚するが、美貌を使って男たちを魅了し殺戮したとも伝えられている[38]。ヘロディアスもまた、二度目の結婚をし、ヘロドを破滅へ追いやるとともに、エリヤであるヨカナンの首を切らせるのだ。結局、カルネ0の最後のフォリオである$F^0 9V^0$と$F^0 10$は、ヘロディアスを示唆させる読書ノートとして終わっていると言えるだろう。

*

カルネは基本的に執筆までの準備期間であり、創作のための意図は垣間見られるものの、非常に恣意的で、整合性に乏しい。さらに、その内容は書物の題名、引用、単なるメモ、単語の羅列、文章とはとうてい言いがたい断片の寄せ集めである。このようなカルネは、推考を重ねられた最終稿の対極に位置していると言える。実際、フローベールについて言えば、カルネの段階で終了し、作品として完成に至らなかった題材もいくつか見受けられる。『ヘロディアス』のカルネにかんしても、草稿のなかでさえ使われないメモのほうが多いほどである。しかし、また同時にそのような思考の断片であるカルネが、執筆の可能性を引き出し、創作への意志を固めさせている事実は見逃せない。カルネに見られるエピソードが直接、最終稿に利用されなかったとしても、それらは潜在的に最終稿の言葉の根底に存在し続けているのだ。それゆえに、カルネを読み解くことにより、フローベールが歴史上の登場人物たちや世界にみいだしていた意味、そして最終的にヘロディアスの名前を作品の題名として選んだ理由が明らかになったと言える。カルネが、ヘロドを滅ぼすことになる人物達、あるいはその時代を構成する民族間の異神教間の確執、さらにその後の世界を支配することになる、ジャン・バティストに象徴されるキリスト教についての記述を終えたあと、ヘロディアスを暗示するフォリオで終わっていることは、フローベールが彼女の存在意義を強く意識したらかにほかならない。ヘロディアスの存在は、あらゆる社会通念あるいは既成概念を打破するものなのである。最終的には、破滅を導くことになるにしても、自己の欲望に翻弄されつつ忠実である彼女の姿は、ボヴァリー夫人やサランボーに通底していると言えるであろう。不統一であるがゆえに、最もフローベールの思考過程を純粋に表現していると考えられるカルネが、その後いかなる草稿の形を経て、作品へと変貌していくかを検討していくことは、今後の課題となるであろう。

註

1） フローベールは1876年8月17日に、姪のカロリーヌへ宛てた書簡のなかで、『ヘロディアスの構想について次のように語っている。「今や、『フェリシテ』を片付けたが、今度は『ヘロディアス』が姿を現している。太陽をうけて輝いている死海の水面が（まるでセーヌ川を見ているように）はっきりと目に見えている。ヘロドとその妻が露台の上にいて、そこからは神殿の金色に輝く屋根瓦が見てとれるのだ」（Gustave FLAUBERT, *Œuvres Complètes de Gustave Flaubert, Correspondance, septième série (1873–1876)*, Paris: Louis Conard, 1930, p.341）。この文章には2つの注目すべき点が隠されている。ひとつはフローベールが『ヘロディアス』執筆にあたって抱いた幻想の堅固さである。彼は、自分の部屋から見えるセーヌ川の現実性を引用することによって、死海という異国の地にある特殊な水の輝きを確固たるものにしようと試みている。もうひとつは、水という共通の要素をとおして、フローベールの視線がそのままヘロドの視線となることである。どこにでも赴き、あらゆる形に変貌すること

ができるが、同時に同質であり続けるという特異さを有する水は、現代と過去、生きている人間と伝説的な人物を結びつけるためにふさわしい媒介である。聖アントワーヌもまた、小舟で川を漂う幻想に浸りながら、さまざまな異界に入りこむことを考えると、水が現実と虚構をつなぐ役割を果たしていることがわかる。

2） Gustave FLAUBERT, *Carnets de Travail, édition critique et* génétique établie par Pierre-Marc de BIASI, Paris: Balland, 1988. このカルネからの引用はすべて拙訳で、ページ数のみを［ ］内に示す。ビアジは、またフローベールのカルネ意義についても研究を行なっている（voir Pierre-Marc de BIASI,《Flaubert et la poétique du non finto》in *le Manuscrit Inachevé*, Paris: CNRS, 1986）。

3） ビアジは、断定することはできないが、『ヘロディアス』の計画が『聖アントワーヌの誘惑』の資料収集の際に浮かんできたことは否定しがたいと語っている。実際、カルネ16bis の1870年の『聖アントワーヌの誘惑』についてのメモの $F^0$3にヴィテリウスについての項目があり、同じカルネ16bis の1876年の $F^0$22にもヴィテリウスの項目がある。少なくとも、フローベールが『ヘロディアス』についてのメモを取る際に、『聖アントワーヌの誘惑』のメモを参考にしたのではないかということは想像できる（voir FLAUBERT, *Carnets de Travail,* op. cit., p.601）。また、デュリー夫人は1871年にすでに『ヘロディアス』の計画がたてれていたと断言している。「1871年に『ヘロディアス』にかんする資料の痕跡があっても驚くにあたらない。[…] クシュク・ハーネムのそばでエジプトの一夜を過ごしたあとのノートに書かれたのと同じ言葉でサロメが描写されていないだろうか」（Marie-Jeanne DURRY, *Flaubert et ses projets inédits,* Paris: Nizet, 1950, p.335）。

4） 『純な心』にかんするメモは、カルネ16の $F^0$40V^0から $F^0$44V^0 [672-675]、$F^0$58V^0から $F^0$54V^0 [692-694] のみであり、『聖ジュリアン伝』についてはカルネ17の $F^0$11から $F^0$12 [721-722]、$F^0$90V^0から $F^0$72V^0 [723-735] のみである。

5） カルネ20は、赤革の表紙の22、5×17、2cmのカルネで、なかに78枚のフォリオが含まれている。それは、最初は考えを書き留めるために使用されていたが、次第に創作計画へと変わっていった。大部分は作品化に至らなかった『ナポレオン３世』のためのものであった（voir FLAUBERT, *Carnets de Travail,* op. cit.）。

6） カルネ16bis は、赤革の表紙で7.2×12cmという小さなカルネである。その中には48枚の紙が含まれており、すべてで76フォリオが鉛筆で書かれている（voir FLAUBERT, *Carnets de Travail,* op. cit., p.599）。このなかで、興味深いのは $F^0$20V^0の聖アンドレについての記述である。「聖アンドレは、まずジャンの弟子であり、その後ジェズの弟子となった」[639]。フローベールは1876年９月15日付けのカロリーヌの書簡で「私は聖アンドレの生涯を […] 見るために図書館へまた行くつもりです。彼は、私の小さな物語のなかの一人になると思います」と（FLAUBERT, *Œuvres Complètes de Gustave Flaubert, Correspondance, septième série (1873–1876),* op. cit., p.348）と語っている。しかし、結局、聖アンドレは『ヘロディアス』に登場することはなかった。

7） $F^0$1V^0には、確かに1876年という数字が書かれているが、『ヘロディアス』にかんするものでも、幾つかはその４、５年前に書かれていた可能性がある。カルネ16bis の $F^0$22,22V^0, 23, 23V^0, 24, 24V^0の『ヘロディアス』についてのフォリオはいずれもおそらく1871年に書かれている。つまり、明確な考えではなかったにしても、『ヘロディアス』の構想は『聖アントワーヌの誘惑』の思考過程のなかで、まず夢想的状態で現われたと言えるだろう。

8） Gustave FLAUBERT, *Trois Contes,* texte, sommaire biographique, introduction générale, bibliographie, notes, ultimes corrections, transcriptions, établis par Peter Michael WETHERILL, Paris: Garnier, coll.《Classiques Garnier》, p.232. ここで、気づくのはフローベールは、ヴィテリウスの容貌を『ヘロディアス』では描いていないということである。16bis においてはヴィテリウスの肉体的特徴をとくにメモしているにもかかわらず、『ヘロディアス』では、ヴィテリウスはまるで、肉体を持たないかのように描写されている。引用文は筑摩書房『フローベール全集４』（1966年）収載の邦訳（山田九朗訳『ヘロディアス』）をもちいるが、文脈によっては筆者が改変をほどこした箇所もある。

9） FLAUBERT, *Trois Contes,* op. cit., pp. 237-238.

10） $F^0$5V^0には「馬の名：アエロペトス、アルマトス、ゲムラ、ミュリヌス、パセリヌス、[…]」というように16もの馬の名がメモされている [609]。

11) FLAUBERT, *Trois Contes,* op. cit., p. 232。

12) *Ibid.*, p.249.

13) 饗宴の広間では、アンチパスを中心に左手にはヴィテリウス、右手にはアウルスが正面の位置を占めている。「アウルスは、紫の絹に銀箔をおいた服の袖を背中の後で結ばせてあった。その髪の毛の渦巻きは段をなし、女のように肥ったその白い胸の上にはサファイアの首飾りが輝いている。傍には、莫蓙の上に胡坐を組んで、たえず微笑をたたえている一人の美少年が控えている。アウルスが厨のなかで見つけてきて、もうひとときも側を離さず、そのカルディア名前が覚えにくいので、ただ『アジアっ子』と呼んでいる少年である」(FLAUBERT, *Trois Contes,* op. cit., pp. 245-246)。このように、アウルスの姿は、贅をこらした怠惰な女性のようである。布地も絹をつかい、袖を背中の後で結ばせるというエロティックな服装である。さらに、銀やサファイアという宝飾品をふんだんに身につけ、側には美小年をはべらせているアウルスは、ヨカナンの首を踊りの報酬として要求するサロメよりも、肉体そのものを感じさせる。彼は贅沢への耽溺と『アジアっ子』に見られるように、際限のない性的欲望によって、ある種の堕落の象徴となっている。また、フローベールは饗宴の場面を、小説のなかで好んで書くが、『ヘロディアス』の饗宴のある側面を表しているのはアウルスであるとも言える。

14) FLAUBERT, *Trois Contes,* op. cit., p. 255.

15) ヘロディアスの名もでているが、彼女は、バティストの舌を刺すという挿話のためであり、間接的な意味しかここでは持っていない。

16) カルネ16は、11.2×6.5㎝という黒革の小さなカルネであり、総数82枚の紙から成立している。中には115のフォリオが含まれており、ところどころインクで下線が引いてあり、鉛筆で書かれている。『三つの物語』にかんしては、『純な心』と『ヘロディアス』のフォリオが含まれている (voir FLAUBERT, *Carnets de Travail,* op. cit., p.643)。

17) $F^0 38V^0$は、『純な心』のための資料より先に書かれたという可能性も大きい。このフォリオは、『純な心』のノートより前にあった事実から、おそらく1876の4月17日以前頃書かれたものだろうとも考えられる。じじつ、まだ、『純な心』を書き始めて間もない頃、書簡のなかで、1876年4月20日にロジェ・デ・ジュネット夫人にフローベールは次のように言っている。「この作品に続いて何を書きたいと思っているかご存じですか。『聖ジャン・バティストの物語』です。ヘロディアスに対するヘロドのひどい仕打ちは大いに心をそそられます。まだ、夢想の段階でしかありませんが、この着想を十分掘り下げてみたいと思っています」(FLAUBERT, *Œuvres Complètes de Gustave Flaubert, Correspondance, septième série (1873–1876),* op. cit., p.296)。

18) $F^0 46V^0$では、ヘロドの父ヘロド大王について「ヘロド大王の家系は、ジュリア人も関係がある」[677]と触れている。ヴィテリウスやアウルスにかんしては、身体的特徴が述べられていたが、主人公ともいえるヘロドについての外観的記述は見られない。彼の肉体あるいは顔については最終稿のなかでも全く語られていない。書かれているのは、自分が置かれている困難な立場であり、統治国の崩壊への予感であり、ヨカナンにたいする本能的恐れである。そして、$F^0 46$や$F^0 46V^0$は、最終稿には直接関係はないが、ヘロドの父親の政治的状況、そして、それを受け継いだヘロドの権力の困難さを示すものとなっている。これらの事実が潜在的要素となって、『ヘロディアス』全編を貫いている絶望感を構成しているのである。つまり、最終稿の独特の雰囲気は、このような緻密な歴史的事実によって決定づけられていたのである。

19) $F^0 48V^0$の月の神の下にも「アウラン：固有名詞：マレイカス、モアイエロン」[681]という名が見られる。

20) $F^0 48$には、男性の固有名詞のところに「マナイ」[680]という名が記されている。この名は、のちに『ヘロディアス』のなかの「マナエイ」の名として使われたと推測できる。

21) FLAUBERT, *Trois Contes,* op. cit., p.224 .

22) *Ibid.*, p.224. ここで言われている「皇帝」とは第2代ローマ皇帝、チベリウスである。アグリッパはチベリウスの後継者第3代ローマ皇帝カリギュラと、のちに結びつくのである。

23) BHVP のために Michel BERTOGNE が執筆した『ギュスターヴ・フローベールの草稿』によるとカルネ6に続いて、カルネ0は見いだされたと記されている。もともとカルネ0は手帳ではなく、12.4×19㎝程のクリーム色の紙が10枚留められているものである。そのなかに14のフォリオがインクや鉛筆で書

かれている(voir FLAUBERT, *Carnets de Travail,* op. cit., p.643)。

24) 確信は持てないにしても、幾つかのフォリオは、『純な心』のための短い取材旅行の後、1876年4月頃、パリにいた時に図書館で調べられ、書かれた可能性は高い。

25) $F^0$1, $F^0$2, $F^0$3は、読書ノートである。カルネ0で最初に注目すべき点は、ヘロド・アグリッパについてのメモである。アグリッパはヘロド大王の孫であり、ヘロディアスの弟であるが、アンティパスに敵対する人物である。$F^0$2には古銭学と一行目に記されているが、その後「ヘロド・アグリッパ　鈴あるいは玉房のついたパラソル　アグリッパ1世　彼の義兄弟そして甥　エルサレムの王だった ーアンティパスはそこでは、決して統治権を行使できなかった」[746]と書かれている。ヴィテリウスの容貌をメモした時も、貨幣に基づいていたが、アグリッパの場合もまた同じである。それは、書物による抽象的描写ではなく、可能な限り具体的にかつ肉体を所有する者として登場人物たちを描きたいという意志の表れである。

26) この文章は、カルネ20の $F^0$24V^0にもあげられている、Henry Baker TRISTRAM, *The Lamb of Moab, travels and discoveries on the East Side of the Dead Sea and the Jordan,* London : J. Murry, 1873　からの抜粋である。

27) FLAUBERT, *Trois Contes,* op. cit., p.223.

28) ヘロドの領地は、地中海岸とティベリアドの町があるゲネザレスの湖の西岸も含んだガリレヤからペレのあたりまでであった(voir FLAUBERT, *Carnets de Travail,* op. cit., p.750)。

29) FLAUBERT, *Trois Contes,* op. cit., p. 224 . ナプルズを省いたのは、発音上の問題からだと考えられる。

30) *Ibid.*, pp. 225-226.

31) *Ibid.*, p. 246.

32) 「マナエイは戻って来たが、ひどく狼狽の態である。４０年の間処刑人の役を勤めてきた。アリストブルスを水に沈め、アレキサンドルの首を絞め、[…] ヨゼフ、アンチパテルの首をはねた自分ではあるが、あのヨカナンは殺せぬ！マナエイは歯の根も合わず、ふるえている。マナエイは、土牢の前で、全身無数の眼におおわれ、炎のようなぎざぎざの歯の真っ赤な大剣を振りサマリヤの大天使を見たと言うのである」(FLAUBERT, *Trois Contes,* op. cit., p. 254)。天使の「全身が無数の眼で覆われ」ているのは、彼が真実の眼を持っているということを意味し、反対にヘロド大王の時代から命令されるままに人を処刑してきたマナエイが盲目であることを示唆している。また、ヨカナンに見られるような創作の部分と事実の部分との混合についてはボナコルソの論文がある (voir Giovanni BONACCORSO, 《Science et fiction: le traitement des notes d'Hérodias》 in *Flaubert, l'Autre,* Presses Universitaires de Lyon, 1989)。

33) ヘロドの饗宴については、ジュネット夫人が草稿を使って詳細に分析している。Voir Raymonde DEBRAY-GENETTE, 《Les débauches apographiques de Flaubert (l'avant-texte documentaire du festin d'*Hérodias*》 in *Romans d'Archives,* 1987, Presses Universitaires de Lille.

34) FLAUBERT, *Trois Contes,* op. cit., p. 247 .

35) *Ibid.*, p.239. ヨカナンの神秘的な声については、次のような論文がある。Voir Juliette FRØLICH, 《La voix de Saint Jean, magie d'un discours: lecture d'un épisode de *Hérodias*》 in *Gustave Flaubert 3: mythes et religion (2),* Paris: Minard, 1988.

36) *Ibid.*, p.230.

37) *Ibid.*, p.253.

38) 上山　安敏、『魔女とキリスト教』、人文書院、1993年、を参照。リリトは『旧約聖書』のなかに魔女として現われるが、起源はバビロンの鬼神学の流れのなかにある。バビロン＝シュメール地方に起こったリリト信仰は夜に血を吸う亡霊神と考えられていた。その後、リリト伝承はユダヤの大衆のなかに口承伝承として伝えられた。しかし、キリスト教教義学によって悪魔に仕える魔女に移し替えられたと考えられる。もともとリリト神話の類型は、世界の民間伝承に見られる豊饒神である。